

序 章 研究の背景と目的及び方法

日本庭園において石組は、庭の骨格をつくる重要な役割を果たしている。庭園は古くから日本人の生活文化を背景に、時代の移り変わりと共にさまざまな様式を呈してきたが、その中で石組が、庭の空間性に影響を及ぼしていることが考えられる。

石組とは、作庭において重要な構成要素の一つであると考えられるが、その手法は庭師により様々であり、さらに庭師の美意識及び感性、技術、技能、そして経験などが大きく影響している。また、作庭手法は技術の伝承において、師弟制度を通じ口伝と実践において伝えられてきた。このように、三尊石や滝組、蓬莱山などの石組手法はあるのだが据える石の高さや石と石の距離などは、庭師の経験や現場での判断による部分が大きいので、石組には具体的なマニュアルがないと考える。

また、石組については、宮江介「枯山水様式における石組構成に関する研究」(2001年)¹や、関西剛康「枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察」(2006年)²などの多数の先行研究がみられる。それらは石組の形状や配置配石などに関する論述が多く、石組と庭の空間性との関わりを示すことが課題一つであると考えられる。

このような状況を踏まえ、これまでの研究では国指定名勝庭園の枯山水庭園に焦点をあて、庭に据えられた石組の有様について現地調査を行った。

その結果、石組による遠近感が庭に広がりや奥行きを与えていることで、庭の空間性に影響を及ぼしていることが考えられると一つの仮説を導き出した。

本論の目的は、現地調査から得た仮説を裏付けるために、代表的な作庭書における石組に関する記述内容とその特徴を明らかにした上で、空間性に関わる事項について考察し、その結果と現地調査から得た仮説を照合することによって、仮説の妥当性を検証することにある。

検証対象とする作庭書は、飛田範夫「造園古書の系譜」³の中から、時系列を明らかにするために、日本最古の作庭書とされる平安時代後期に編纂されたとされる『作庭記』⁴、室町時代に著された『山水並に野形図』⁵及び『嵯峨流庭古法秘伝の書』⁶、江戸時代に著さ

れ庶民の間まで幅広く読まれた『築山庭造伝（前編）』⁷の4冊をとりあげた。また、『嵯峨流庭古法秘伝の書』、『山水並に野形図』、『築山庭造伝（前編）』の三冊の中には挿図が掲載されており、そこに描かれた石組は、当時の特徴を時系列的に比較検証できる重要な検証材料である。尚、検証にあたっては上原敬二の造園古書叢書全10巻のうち『解説 山水並に野形図』『解説 余景作り庭の図・他三古書』『築山庭造伝（前編）解説』を底本とし、作庭記については中村一、尼崎博正『風景をつくる』⁸（2011年）田村剛『作庭記』⁹（1964年）、斉藤勝雄『図解 作庭記』¹⁰（1996年）、『築山庭造伝（前編）』については中村一、尼崎博正『風景をつくる』（2011年）をそれぞれ参考とした。

第1章 現地調査から導き出した仮説

まず石組の概略を把握するために、京都を中心とする国指定名勝庭園（平安時代1件、鎌倉時代5件、室町時代7件、桃山時代6件、江戸時代18件、近現代10件）の47庭園を選定し、現地調査をおこなった（表1）。

その中で、石組の特徴が顕著にみられ、かつ、石組と庭の空間性の相関が比較的明確な枯山水21庭園に焦点をあてそのうち典型的な5庭園に対して分析をおこなった。分析過程において、重森三玲が昭和49年（1974）に作成した『日本庭園史大系第6巻』所載の実測図を基に石の粘土模型を作り石組を再現した。石組による遠近感や視線の誘導に、石の天端の高低差、石の見つきの大小、石の配置が大きく影響していると考えられたことから、この3点を選び、制作した粘土模型を使用し検証実験をおこない、それぞれを変化させながら自らの感覚の妥当性を逐一確かめた。見つきとは、上原敬二『石庭のつくり方』（2006年）の中で「石を正面から見たとき目に直面する部分をいう」¹¹と述べているように、石を正面から捉えたボリューム感・質量の大小である。

その結果、石組は隣接する石の天端の高低差及び天端の形状の違い、石の見つきの大小、石の配置状況により「立体的石組」と、「平面的石組」に2つの特徴に分類されることがわかった。「立体的石組」は、石の天端が凹凸豊であり、かつ集团的である。対する「平面的石組」は、天端の凹凸が乏しい石を分散的に配置し、全体として概ね平坦であることが特徴である。

さらに、「立体的石組」の大仙院庭園や本願寺大書院庭園、酬恩庵庭園では、石組による遠近感が感じられることで空間に奥行き感をつくり出す役割を果たしているといえ、一方で、「平面的石組」である龍安寺庭園や圓通寺庭園は、石の高さが抑えられ分散して配置されていることから、遠近感が感じられにくく庭の余白の多さも相って空間に広がり感をつくりだしているのが特徴といえよう。

また「立体的石組」では庭の遠景に立石を据える「逆遠近」の手法がとられていることにより、視線は焦点となる立石を中心とした石組に集中するとみられる。なかでも、大徳

寺大仙院庭園、本願寺大書院庭園では一際存在感のある立石があり庭の奥に据えられる「逆遠近」の石組であり、そこへおのずから視線が向けられ奥行き感を強調されている「集中型」の石組である。

一方、龍安寺庭園、圓通寺庭園のような「平面的石組」は、一つの石に視線が集中することなく庭全体を見渡すことによって広がり感をだしている「非集中型」の石組といえる（図1）。

さらに、「集中型」の石組の中でも、存在感のある立石で構成されている大仙院庭園は、石組に視線を集中させることで庭園としての景を庭園内で完結させている「完結型」といえる。一方、本願寺大書院庭園、酬恩庵庭園の石組は庭奥の築山上に据えられた存在感のある立石へと視線を集中させると共に、そこからさらに庭園の背後へと視線を導き外の景色へ繋いでいる。本願寺大書院庭園は背後の建築物（御影堂）、酬恩庵庭園は遠くの山の景を取り入れていることで庭の空間性に広がり感を与えているといえる。このように「集中型」の石組は庭の空間性に関わる二面性をもっていることがわかる（図2）。

また「非集中型」に関しては、圓通寺庭園は、石組そのものは存在感を主張しないで主役となる比叡山を引き立たせる「自己滅却型」といえ、庭園外の景色を取り込むことで空間に広がりにあたえている。それとは逆に龍安寺庭園は、石組が視線を分散させることにより庭園内で景が完結する「完結型」といえる（図3）。

なお、「集中型」の「庭園外の景色を繋ぐ」タイプ（本願寺大書院庭園）及び、「非集中型」の「庭園外の景色を際立たせる」タイプ（圓通寺庭園）は、共にこれまで「借景」とされてきたものであるが、このように借景には2つのタイプがあるとみることができるのである。

以上のように石組は、石組の天端の高低差があり集团的である「立体的石組」と比較的平坦で分散的である「平面的石組」の二つに分類される。さらに「立体的石組」は「集中型」であり「平面的石組」は「非集中型」であるように、それらには異なる視線の誘導がある。そして各々に、庭園内で景を完結させている場合と庭園外の景色を取り込んでいる

場合があり、それは借景の2つのタイプと言えるのである。

これら考察結果を図にまとめたものが「石組と庭の空間性の相関図」である（図4）。

但し、「非集中型」のうちの「完結型」とした龍安寺庭園については、周宏俊が「日本における借景庭園の空間構成に関する研究」（2013年）¹²の中で「龍安寺方丈庭園については一般的に男山及び山上の石清水八幡宮を対象とする借景庭園とされている。」と述べており、また、進士五十八も「「借景」に関する研究—景観構造並びに借景思想にみる自然への態度の日本の特質について」（1986年）¹³の中で、「龍安寺の枯山水部分を描いた明治の画家本多錦吉郎のスケッチであるが、絵の中には借景対象といわれる男山八幡宮の丘が見える。」と述べていることから、龍安寺庭園が男山の石清水八幡宮を眺望とする「自己滅却型」の借景庭園であった可能性も否定できない。

第2章 作庭書から読み解く石組

取り上げた4つの作庭書の概略は以下のとおりである。

『作庭記』

平安時代後期に橘俊綱によって編纂されたとされる日本最古の作庭書であり、平安時代の寝殿造の建物に付随する庭造りの基本姿勢からはじまり、地割と骨格、池や流れ、島などのさまざまな表現手法、そして滝のつくり方、落とし方、遣水のつくり方、立石の口伝と石の禁忌、更に、そして樹の事、泉の事と庭の重要な構成要素を具体的に述べられている。尼崎博正は「寝殿造庭園についてであるとはいえ、地割りから作庭現場での具体的な技術に至るまで、作庭の全プロセスに言及していることの意味も大きい。」¹⁴と述べているように、石組についての具体的な記述がある事や最古という時代性を含め、石組の研究には欠かせない一冊であると考えられる。

『山水並び野形図』

文正元年(1466)増圓のよって著されたとされる室町時代の作庭書である。飛田範夫も「造園古書の系譜」では「江戸時代より前の古書としては、『秘本作庭伝』は年代を偽っているから、『作庭記』、『童子口伝書』、『山水並び野形図』、と『嵯峨流庭古法秘伝之書』の4冊しか存在していない。」¹⁵としているように、数少ない室町時代の作庭書として重要である。『作庭記』同様に、作庭における心構えから始まるが、特徴は役石についてと樹木についての記述が多いこと、そして『作庭記』にはみられない挿図が描かれていることである。

『嵯峨流庭古法秘伝之書』

『山水並び野形図』とともに、室町時代に著されたとされる作庭書である。作者、年代ともに正確には判明していないが、飛田範夫の「造園古書の系譜」、鈴木里佳、三浦彩子の「嵯峨流庭古法秘伝之書の異本に関する研究」(2011年)では「原著作者は不明であるが、年代は奥書の年号に基づき、先学の古文書研究では室町時代の成立と推測されている。」¹⁶とされる。

全体で26項目と他の作庭書と比較するとボリュームが少なめであるが真行草に分けられ

た石組の挿図が描かれていることが大きな特徴である。内容は、作庭の心構えから始まり、庭へ据える石の位置と役石名、植栽、石燈籠、庭の見方が述べられている。

『築山庭造伝（前編）』

江戸時代には約 18 種類の作庭書が存在していたとされるが、享保 20 年（1735）に北村援琴によって著された上・中・下巻 3 冊からなる作庭書である。

尼崎博正『風景をつくる』（2011 年）では「この書物が庶民の間で庭作りのバイブルとして読まれつづけた」¹⁷と述べ、上原敬二の『築山庭造伝（前編）解説』の総説では「これはかなりひろく読まれた書物と認められている。」¹⁸とされているように、本書が江戸時代の代表的作庭書であったことがわかる。

上・中・下巻あわせて 103 の項目があり、「山水作りやう法式」¹⁹から始まり、「石の立やう木の植やうの事」²⁰など、作庭の基本姿勢から具体的な技術まで詳細に述べられている。また、当時実在した庭園とモデル庭園の庭園図が 43 図が描かれている。当時の庭園の様子が挿図に描かれていることが特徴の一つでもある。

以上の 4 冊の作庭書から、石組と庭の空間性との関わりが考えられるキーワードを抽出したところ、以下の三つの視点が浮かび上がってきた。

第 1 節 斜石の存在－石組の基本形

『作庭記』は、冒頭の「石をたてん事まつ大旨をこころふへき也」²¹から始まる。尼崎博正は『風景をつくる』（2011 年）の中で、「冒頭の「石を立てん事」というのは「作庭にあたっては」という意味で、当時、石を立てることが作庭の根幹であると認識されていたことがわかる」²²と述べ、また田村剛も『作庭記』（1964 年）の中で「石を立てることが庭造りの本質的なものだということができる」²³と述べているように、作庭において石を立てることが根幹をなすと位置づけられていたことは、石組が庭の骨格を創りあげているという観点から見ても明らかである。

『作庭記』では、「立石の口伝」を中心に石について述べられている項目が、41 項目あ

り、全体の約7割を占めている。具体的な石の据え方については、「石を立てんにはまず大小石をば運び寄せて立つべき石をば頭をかみにし、臥すべき石をば面を上にして庭の面にとり並べて、かれこれの稜を見合わせゝ要事にしたがいて引き寄せゝ立つべきなり。」

²⁴、また「石を立るに、臥する石に立てる石のなきは、苦しみなし、立る石に左右の脇石、前石には臥石等は必ずあるべし。」²⁵と述べられているように、石の据え方として「立つ」と「臥す」の二通りの形をあげていることがわかる。

また、「石を立んには、先主石の角あるを一つ立おほせて、次々の石をば、その石の乞んに随ひて立べき也。」²⁶、「石を立つるに三尊仏の石は立ち、品文字の石は臥す常時なり。」²⁷とも記していることから、「立つ」と「臥す」という形が石を据える基本的な形であり、第1章で述べた「石組と庭の空間性の相関図」(図4)で示した石組の特徴である「立体的石組」と「平面的石組」にかかわっている。

ところが、『山水並に野形図』には、『作庭記』では見られない「斜」という字が現われ、挿図でも「船隠石」との名称で斜に据えられた石が描かれていることが注目される(図5)。

すなわち、『山水並に野形図』では「又野山二行テ石ヲ取二横斜径ノ三ヲ心ニカケテ取べき也」や「上二沙汰スル所ノ横斜径ノ三ヲ心ガケテ立べき也」²⁸との記述である。これについて上原敬二は、『解説 山水並に野形図・作庭記』(1982年)の中で「横石、斜石、立石を選ぶということは合理的である、沙汰するとは知らせたいという意味、これら三形を天(立石)地(横石)人(斜石)とする考え方は江戸時代にも存在する」²⁹と解説しているように、石を斜めに据えることが一般化されていたことがわかる。

これらを踏まえ、あらためて『作庭記』を検証してみると「立つ」と「臥す」を基本としながらも、斜に石を立てる場合のあることを示唆する記述がわかった。

それが「立石の口伝」の中の「石をたてんに頭うるはしき石をは前石にいたるまでうるはしくたつへし、かしらゆかめる石をは、うるはしきを面にみせしめておほすかたのかたふかんことはかへりみるへからす。」³⁰との記述である。尼崎博正は「石の頭の「うるわしき」を選び、前石にいたるまで「うるわしく」立てていくのだが、その際、頭がゆがんだ

石でも「うるわしき」面を見せるためなら、石全体の姿が傾いてもいっこうにかまわないとする。」³¹と解説し、田村剛は「頭のゆがんだ石では、その正面を表に向けて、大体の姿が傾いても構わないのである。」³²また、斉藤勝雄は「その全体の姿が傾いていても、意に介すことはない。頭が安定した形になってさえすれば、全体もそれにつれて安定して見えるものである。」³³と述べているように、石を立てるにあたりその形状により石が傾いても安定して据えることができれば良いと「斜め石」の存在を認めていると同様の解釈をしている。また、「傾く石あれば支うる石あり」との記述もみられることから、「立石」といっても垂直に立てるだけではなく斜めに石を据えられていたことがわかる。

その一例として、『作庭記』の時代に作庭された平泉にある毛越寺庭園の池中立石である。この立石は「斜石」の典型といえるが、2011年3月11日の東日本大震災で、更に傾斜したために修復作業が行われた。その際の発掘調査によって当初から斜めに据えられていたことがあきらかになったのである（図6）。

以上を踏まえ、（図4）に「石を据える基本形」として「立石」、「臥石」の他に「斜石」を追加修正した。

第2節 石組の氣勢

第1章で石組には「立体的石組」と「平面的石組」があり、「立体的石組」の大仙院庭園や酬恩庵庭園、本願寺大書院庭園では、立石に視線が集中することを明らかにしたが、なかでも本願寺大書院庭園は他の2つの庭園に比べると地形の起伏に沿っておのずから築山上の立石へと視線が導かれていくことがわかる。

『作庭記』には「山の麓、並びに野筋の石はむら犬の伏せるが如し、豕むらの走り散れるが如し、小牛の母に戯れたるが如し。」³⁴や「およそ石を立つことは逃ぐる石一両あれば追う石は七八あるべし、例えば童部の「とちようゝひひくめ」という戯れをしたるが如し。」³⁵など石組を動物の動きに例え表現されていたり、「また、石を立つには逃ぐる石あれば追う石あり、傾く石あれば支うる石あり、踏まうる石あれば受くる石あり、仰げる石

あればうつむける石あり、立てる石あれば臥せる石ありといえり。」³⁶とある。特に、「傾く石あれば支うる石あり」は「斜石」による石組の動きであることが推測できる。

『山水並に野形図』のいくつかの挿図は、地形にならった石組であり、「石を据える基本形」である「立石」「臥石」「斜石」の3つが描かれていることがわかる。(図7)には「斜石」が描かれており、石組に動きが確認できる。そして、「斜石」による石の組に動きにより視線が上部へ誘導されており、特に「斜石」が2つ描かれた挿図のほうがより視線が上部へ誘導されやすい。この視線の誘導する力が空間の勢いであると考ええる。この空間の勢いを「氣勢」と位置づけた。

また、「立体的石組」の本願寺大書院庭園では、石組に地形の起伏が相まって庭の後方の御影堂方向へ視線が上昇方向へ誘導されていくことから、地形の起伏が「氣勢」が関連しているといえるのではないだろうか。

一方で、地形が平坦であり視線が分散される「平面的石組」の龍安寺庭園や圓通寺庭園には石組の動きがあまり感じられないことから、「氣勢」が弱いといえる。

「斜石」による石組の動きによる視線の誘導と地形の起伏や地形の形状による相乗効果が庭の空間性に「氣勢」が関連していることがわかった。

第3節 地形との関り

以上のように空間の「氣勢」に注目すると、石組の遠近感と石組の動きに地形の起伏が大きく影響していることがわかる。『山水並に野形図』と同じく室町時代に著された『嵯峨流庭古法秘伝之書』の挿図に描かれた真行草は「氣勢」を象徴的に表現しているとみることができる。

挿図は真形草と大きく三つに分類されており、真の真体と真の草体、行の体と行の草体、草の体と草の草体にそれぞれ区分されている(図8)。

真の石組は、起伏激しい地形の中で石の天端の高低差が大きい石が描かれており、「立体的石組」といえる。一方で、草の石組は、石の天端の高低差は小さく石が分散され庭の

余白が多い「平面的石組」といえる。二つの挿絵を比較するとその違いはあきらかである。

これらの挿図には注目すべき二つの事柄が挙げられる。一つは真行草すべてにおいて庭の近景にあたる部分には「臥石」として「礼拝石」が描かれており、庭の遠景部分には「立石」が描かれていることである。これは逆遠近の構造であり石組の一つの手法といえる。中でも真の石組は、幾重にも重なった逆遠近の石組構造であり、遠景の「立石」へと視線を誘導させている。更に、地形の起伏が加わることで庭に奥行き感をもたせているのである。

二つ目は真の真体で描かれた遠景の立石である。遠景の山には中腹、麓に石が描かれているのだが、更に山の後方にも立石が描かれていることがわかる。これにより隆起した地形の更に後方の立石へと意識させることで視線を誘導し地形の起伏と石組の遠近感により空間性に奥行きをもたせていることが考えられる。このことにより、地形にならった石組の配置により、石組と地形の起伏による遠近感の相乗効果が、庭の空間性に関係し奥行きを与えていると言える。

また、『作庭記』では「また山うけの石は山をきりたてん所には多く立つべし、芝を伏せん庭に続かん所には山と庭との境、芝の伏せ果ての際に忘れざまに高からぬ石を据えもし、伏せもすべきなり。」³⁷と述べられているように、地形の起伏部分と平坦部分の境目に「臥石」を据えるとの記述がある。これは空間の境目に石を据えることで景色を分節するという意味と解釈できる。

また、『築山庭造伝（前編）』では「山水遠近の事」で「遠山ハ低、近山ハ高し、遠水ハ高く、近水ハ低し、此意を以て築山、遣水の巧をなすべし。」³⁸と述べられ、「遠方の景を我庭前へうくる伝」では「自然の地景を用ひて、庭を作るに猶以作者の働きあるべき事なり。書院座敷等の襟より見渡し境内の山をひくめ、又ハ樹木等をきりて遠き眺望の景を庭前へうつつうくる事あるべし。」³⁹と遠近を強く意識した記述がみられ空間性の広がり認知されている。中でも、「遠方の景を我庭前へうくる伝」は比叡山を眺望とする「圓通寺

庭園」と共通する空間構造である。また、「総じて庭仕様の事」では「近水ハ高くすべし、遠山ハ低くすべし、是則金岡が水石を置むこと妙なりとへるを思ふべし、たゞむといふ事ハ遠近の斗ひなりと知るべし。」⁴⁰と遠近法について明確に述べられていることから、石組の遠近感が庭の空間性に影響してことが明らかとなり、石組と空間性の関係性がより明確化されたのである。

『山水並に野形図』と『嵯峨流庭古法秘伝之書』では、それぞれの中の挿図により石組と庭の空間性が描かれているといえる。さらに「庭坪地形」や「庭坪地形之図」では「坪の広さ、狭き多少あり。此図の地形を以て、山水を作るべし。又真行草あつて、山も島もなき事あり、石ばかり立てるときも此図を以て石を立てし、又よこにいかほどながくおくとも、いかほどふかくとも、此図を以て相はからふべきものなり。」⁴¹と述べられていることから、近景の礼拝石は臥せ石であり遠景の山に立石の三尊石と逆遠近の石組であり本願寺書院庭園の構造が該当する。

このように「立体的石組」は石の基本形と地形の起伏によって創られた石組の特徴による「氣勢」が視線を誘導することで庭の奥行き感という空間性に大きく関係していることと、また「平面的石組」のようにあえて石組の低く遠近感も弱く地形の起伏も平坦することにより外の景色を眺望することで庭の空間性に広がり感をあたえていることがあきからである。

結 章 検証成果—石組と空間性—

第1章では、国指定名勝庭園を中心に47庭において石組の有様を明らかにするために現地調査をおこなった結果、特にその中でも、石の天端の高低差、石の見つきの大小、石の配置に注目することで「立体的石組」と「平面的石組」の2つの特徴があきらかとなった。石組の2つの特徴には異なる視線の誘導があり、「立体的石組」は「立石」に視線が集まる「集中型」であり、「平面的石組」は点在する石組によって一つの石に視線が集まらない「非集中型」に分類されることがわかった。さらに「集中型」には「庭園外の景色を繋ぐ」場合と庭園内の景を完結させる「完結型」があり、「非集中型」には「庭園外の景色を際立たせる」場合と「完結型」が各々あり、借景には「集中型」により外の景色を繋ぐタイプと「非集中型」による庭園外の景色を際立たせるタイプの2つのタイプがあることがわかった「石組と庭の空間性の相関図」(図4)。

第2章では、「石組と庭の空間性の相関図」(図4)を基本に、4つの作庭書を取り上げ石組に関する記述を抽出し空間性との関りについて分析した結果、石の据え方には「立石」、「臥石」の他に「斜石」の3つの基本形があることがあきらかとなった。「立石」及び「斜石」は「立体的石組」の特徴であり、「臥石」は「平面的石組」を特徴づけていることがあきらかとなった。

「斜石」は『山水並に野形図』の挿図で描かれており、湾曲した地形に倣って傾斜し、斜石が加わることで石組に動きを与えていることがわかる。そして、その動きによって視線が挿図の上部へ誘導されているのである(図7)。このように、「斜石」は「立体的石組」の基本形でもありながら石組に動きを与える要素を含んでいることがわかった。

また、「立体的石組」と「平面的石組」には地形の起伏が関連しており、特に「立体的石組」の空間の遠近感 は地形の起伏によって増幅される特徴がある。『嵯峨流庭古法秘伝之書』に描かれた真行草の石組の挿図では、地形に起伏がある真の石組は「立体的石組」であり、草の石組の地形は平坦であり「平面的石組」に分類されるのだが、「立体的石組」のうちの本願寺大書院庭園ではその特徴が顕著である。「平面的石組」である龍安寺

庭園や圓通寺庭園は草の石組の典型といえる。このように、石組には地形の起伏が密接に関連しているのである。

地形と石組の関わりがあきらかになったのだが、石組の中でも特に「斜石」による石組の動きと地形が相まることでその相乗効果によって空間に氣勢が生まれ奥行き感がつくられるのである。本願寺大書院庭園は「立体的石組」の特徴を顕著に表しており、石組と地割りの起伏豊かな地形による相乗効果によって生まれた「氣勢」が有効的に築山上の立石方向へと誘導されているのである。更に、立石方向から背後の建築（御影堂）へと導かれることで奥行き感を与えていることから、「氣勢」が庭の空間性に影響していることがあきらかとなった。

以上、「石組と空間性の相関図」（図4）に新たな項目を追加し細分化した、新たな「石組と空間性の相関図2」（図9）を以下でまとめる。

「立石」、「臥石」により分類される「立体的石組」と「平面的石組」は、『作庭記』に「三尊仏の石」と「品文字の石」と記されているように、「立石」と「臥石」によって「立体的石組」と「平面的石組」の2つの特徴に分類される。

しかし、『山水並に野形図』には、『作庭記』で見受けられなかった斜めの記述があると同時に、「斜石」が挿図で描かれているのである。中でも（図5）は「斜石」に「船隠石」と名付けられ強調されていることがわかることから「斜石」の存在が浮かび上がったのである。これにより『作庭記』を検証してみると「かしらゆかめる石」や「傾く石あれば、支ふる石あり」と傾く石を連想させる記述があり、さらに『作庭記』が著された同時期には毛越寺庭園がある。そこにある池中立石は発掘調査によって、当時から斜めに据えられていたことがあきらかであることから、石を据える基本形に「斜石」が必要な要素であることがあきらかとなった。

調査の中で、「立体的石組」は地形が起伏しており「平面的石組」は地形が平坦であることから、地形の起伏の有無が石組の特徴に関連していることもあきらかとなった。「立体的石組」である本願寺大書院庭園は、地形が大きく起伏しており、反対に、「平面的石

組」である龍安寺庭園や圓通寺庭園の地形は本願寺大書院庭園とは対照的な平坦な地形である。『嵯峨流庭古法秘伝の書』には真行草に分けられた6つの挿図が描かれており、真の挿図と草の挿図を比較すると地形の起伏の有無が一目瞭然である。それぞれに描かれた石組を見比べてみると、真の石組は、石と石の天端の高低差が大きいことがわかる。また、近景には「臥石」が多く「立石」は遠景に多く描かれていることから、逆遠近の石組構造であることもわかる。また、起伏した地形のさらに後方に描かれた立石は、その起伏と相まって近景の「臥石」との石の天端の高低差がより大きくなっているのである。このように、「立体的石組」の天端の高低差は、地形の起伏との相乗効果によって大きくなるのである。また、草の石組は真の石組に比べ、全体的に石の大きさが揃っており地形の起伏が乏しいことがわかる。そして、奥行き感が感じられる真の石組に比べると、奥行き感が感じられないのである。これは、本願寺大書院庭園や龍安寺庭園、圓通寺庭園の調査においてもあきらかであることから、2つの石組の特徴には地形の起伏の有無が関連していることがあきらかとなった。

「立体的石組」と「平面的石組」には、3つの基本形と地形の起伏の有無が関係し2分されることがあきらかになったのだが、「立体的石組」には「斜石」によって石組に動きがみられるのである。『山水並に野形図』には(図7)で示したように5つの挿図はすべて地形が湾曲しており、その曲線に倣うように「斜石」が描かれていることがわかる。そして、「斜石」の傾斜方向への石組の動きによって挿図上部へ視線が誘導されていることがわかる。特に、「斜石」が2つ描かれた挿図のほうがより視線が上部へ誘導されやすい。この視線を誘導する力が空間の勢いであると考え、この空間の勢いを本論では「氣勢」と位置づけた。

以上4つの作庭書の検証により、3つの基本形と地形の起伏の有無によってつくられた「立体的石組」と「平面的石組」は、その特徴によって「氣勢」が生まれる。そして、「氣勢」が庭の空間性に大きく影響し奥行き感を与えていることがあきらかとなった。

(13062文字)

- ¹ 宮江介「枯山水様式における石組構成に関する研究」『ランドスケープ研究』64 巻 5 号、日本造園学会、2001 年、p p. 431-434
- ² 関西剛康「枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察」『ランドスケープ研究』69 巻 5 号、日本造園学会、2006 年、p p. 687-690
- ³ 飛田範夫「造園古書の系譜」『造園学会誌』47 巻 5 号、日本造園学会、1984 年、p p. 49-54
- ⁴ 上原敬二『解説 山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982 年
- ⁵ 上原敬二前提書 (4)、1982 年
- ⁶ 上原敬二『解説 余景作り庭の図・他三古書』加島書店、2006 年
- ⁷ 上原敬二『築山庭造伝 (前編)』加島書店、2008 年
- ⁸ 尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2011 年
- ⁹ 田村剛『作庭記』相模書房、1964 年
- ¹⁰ 斉藤勝雄『図解 作庭記』技報堂、1996 年
- ¹¹ 上原敬二『石庭のつくり方』加島書店、2006 年、p. 93
- ¹² 周宏俊「日本における借景庭園の空間構成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』78 巻 689 号、2013 年、p. 1662
- ¹³ 進士五十八「「借景」に関する研究—景観構造並びに借景思想にみる自然への態度の日本の特質について」『造園雑誌』50 巻 2 号、日本造園学会、1986 年、p. 85
- ¹⁴ 田村剛前提書 (9)、p. 212
- ¹⁵ 上原敬二前提書 (4)、pp. 49-54
- ¹⁶ 鈴木里佳、三浦彩子「「嵯峨流庭古法秘伝之書」の異本に関する研究」『日本建築学会論文集』第 76 巻 670 号、2011 年
- ¹⁷ 田村剛前提書 (9)、p. 246
- ¹⁸ 尼崎博正前提書 (8)、p. 1
- ¹⁹ 尼崎博正前提書 (8)、p. 15

-
- 20 尼崎博正前提書 (8)、p. 21
- 21 上原敬二前提書 (5)、p. 177
- 22 上原敬二前提書 (5)、p. 213
- 23 齊藤勝雄 (10)、p. 177
- 24 上原敬二前提書 (5)、
- 25 上原敬二前提書 (5)、p. 274
- 26 上原敬二前提書 (5)、p. 93
- 27 上原敬二前提書 (5)、p. 93
- 28 上原敬二前提書 (5)、p. 11
- 29 上原敬二前提書 (5)、p. 12
- 30 上原敬二前提書 (5)、p. 62
- 31 田村剛前提書 (9)、p. 230
- 32 齊藤勝雄 (10)、p. 247
- 33 上原敬二前提書 (11)、pp. 81-82
- 34 上原敬二前提書 (5)、p. 91
- 35 上原敬二前提書 (5)、p. 91
- 36 上原敬二前提書 (5)、p. 91
- 37 尼崎博正前提書 (8)、p. 91
- 38 尼崎博正前提書 (8)、p. 19
- 39 尼崎博正前提書 (8)、p. 37
- 40 尼崎博正前提書 (8)、p. 106
- 41 尼崎博正前提書 (8)、p. 43

参考文献

尼崎博正共著『風景をつくる』、昭和堂、2011年

上原敬二『解説 山水並に野形図・作庭記』、加島書店、1982年

田村剛『作庭記』、相模書房、1964年

斉藤勝雄『図解 作庭記』、技報道、1996年

上原敬二『解説 余景作り庭の図・他三古書』、加島書店、2006年

鈴木里佳、三浦彩子「嵯峨流庭古法秘伝之書」の異本に関する研究『日本建築学会論文集』
第76巻670号、2011年

上原敬二『築山庭造伝（前編）』、加島書店、2008年

小野健吉「『築山庭造伝（前編）』、所載の役石」、日本庭園学会誌、1999年

飛田範夫「造園古書の系譜」『造園学会誌』47巻5号、日本造園学会、1984年、pp. 49
－54

森縄『「作庭記」の世界』、日本放送出版協会、1986年

宮江介「枯山水様式における石組構成に関する研究」『ランドスケープ研究』64巻5号、
日本造園学会、2001年、pp. 431－434

関西剛康「枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察」『ランドスケープ研
究』69巻5号、日本造園学会、2006年、pp. 687－690

周宏俊「日本における借景庭園の空間構成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』
78巻689号、2013年、p. 1662

進士五十八「「借景」に関する研究—景観構造並びに借景思想にみる自然への態度の日本
的特質について」『造園雑誌』50巻2号、日本造園学会、1986年、p. 85

図 版 編

図版目次

表 1 調査対象庭園一覧表

図 1 石組の「集中型」と「非集中型」

図 2 「集中型」の二面性

図 3 「非集中型」の二面性

図 4 石組と空間性の相関図

図 5 斜石の挿図

図 6 毛越寺庭園の斜石

図 7 斜石と地形による氣勢

図 8 石組と地形の関係

図 9 石組と空間性の相関図 2

表1 「調査対象庭園一覧表」

	時代	名称	様式	住所
1	平安	毛越寺	池泉	西磐井郡平泉町
2	鎌倉	西芳寺庭園	枯山水・池泉	西京区松尾神ヶ谷町
3		天龍寺庭園	池泉	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町
4		鹿苑寺庭園	池泉	北区金閣寺町
5		南禅院庭園	池泉	左京区南禅寺福地町
6		永保寺	池泉	多治見市虎渓山町
7	室町	大仙院書院庭園	枯山水	北区紫野大徳寺町
8		龍安寺方丈庭園	枯山水	右京区竜安寺御陵ノ下町
9		慈照寺庭園	池泉	左京区銀閣寺町
10		靈雲院庭園	枯山水	右京区花園妙心寺町
11		退蔵院庭園	枯山水	右京区花園妙心寺町
12		二条城二之丸庭園	池泉	中京区二条城町
13		龍源院	枯山水	北区紫野大徳寺町81
14	桃山	醍醐寺三宝院庭園	池泉	伏見区醍醐東大路町
15		本願寺大書院庭園	枯山水	下京区門前町(堀川通七条上ル)
16		旧円徳院庭園	池泉(溜)	東山区高台寺下河原町
17		本法寺庭園	枯山水	上京区本法寺前町
18		桂離宮	池泉	西京区桂御園町
19		名古屋城二之丸庭園	池泉(溜)	名古屋市中区丸の内
20	江戸	圓通寺	枯山水	左京区岩倉幡枝町
21		龍潭寺	池泉	亀岡市蔭田野町太田
22		大徳寺方丈庭園	枯山水	北区紫野大徳寺町
23		高台寺庭園	池泉	東区下河原町
24		涉成園	池泉	下京区東玉水町(間之町通正面)
25		金地院庭園	枯山水	左京区南禅寺福地町
26		成就院庭園	池泉	東山区清水一丁目
27		酬恩庵庭園	枯山水	京田辺市薪
28		南禅寺方丈庭園	枯山水	左京区南禅寺福地町
29		滴翠園	池泉	下京区門前町堀川通り七条上
30		修学院離宮	池泉	左京区修学院山神町
31		仁和寺	池泉・茶庭	右京区御室大内町
32		曼殊院	枯山水	左京区一乗寺竹之内町
33		内々神社	池泉	春日井市内津町
34		水前寺成趣園庭園	池泉	熊本市水前寺公園
35		靈洞院庭園	池泉	東山区小松町
36		兼六園	池泉	金沢市兼六町
37		実相院	池泉	左京区岩倉上蔵町
38	明治	對龍山莊庭園	池泉	左京区南禅寺福地町
39		盛美園	池泉・枯	南津軽郡尾上町
40		無鄰菴庭園	流	左京区南禅寺草川町
41	昭和	東福寺本坊	枯山水	東山区本町十五丁目
42		光明院	枯山水	東山区本町十五丁目
43		重森三玲美術館	枯山水	左京区吉田上大路町34
44		松尾大社		西京区嵐山宮町3
45		龍吟庵	枯山水	東山区本町十五丁目
46		瑞峯院	枯山水	北区紫野大徳寺町81
47		光明禪寺	枯山水	太宰府市大宰府

重森三玲『日本庭園史大系第三巻～第二九巻』昭和46(1971)～昭和49(1974)

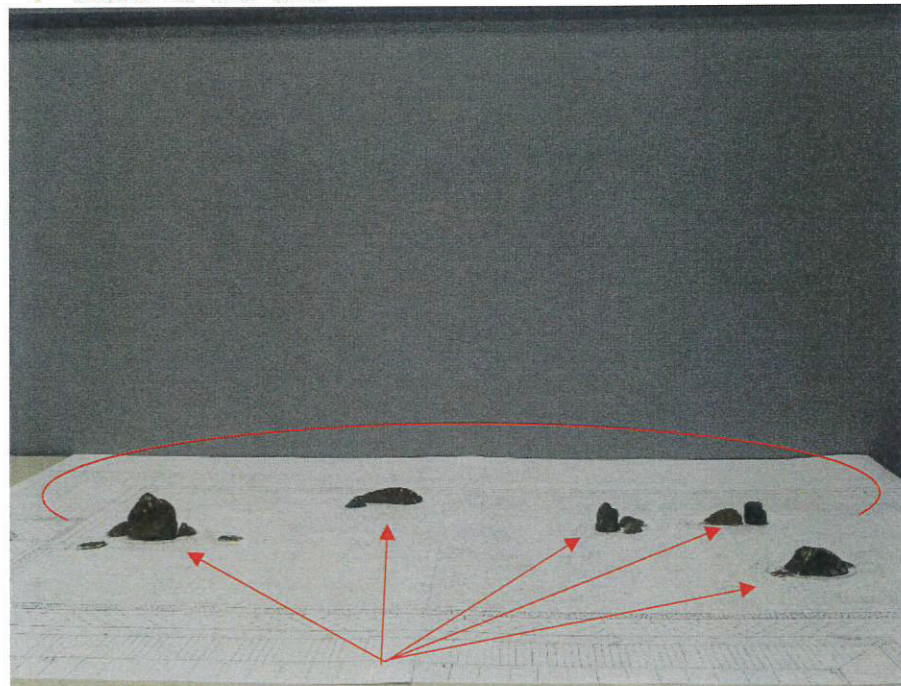
京都林泉教会『日本庭園鑑賞便覧』平成14年(2002)

立体的石組



大仙院庭園粘土模型 （筆者制作）

平面的石組



龍安寺庭園粘土模型 （筆者制作）

視線の方向



図1 「石組の「集中型」と「非集中型」」

庭園内の景を完結



大仙院庭園 (筆者撮影)



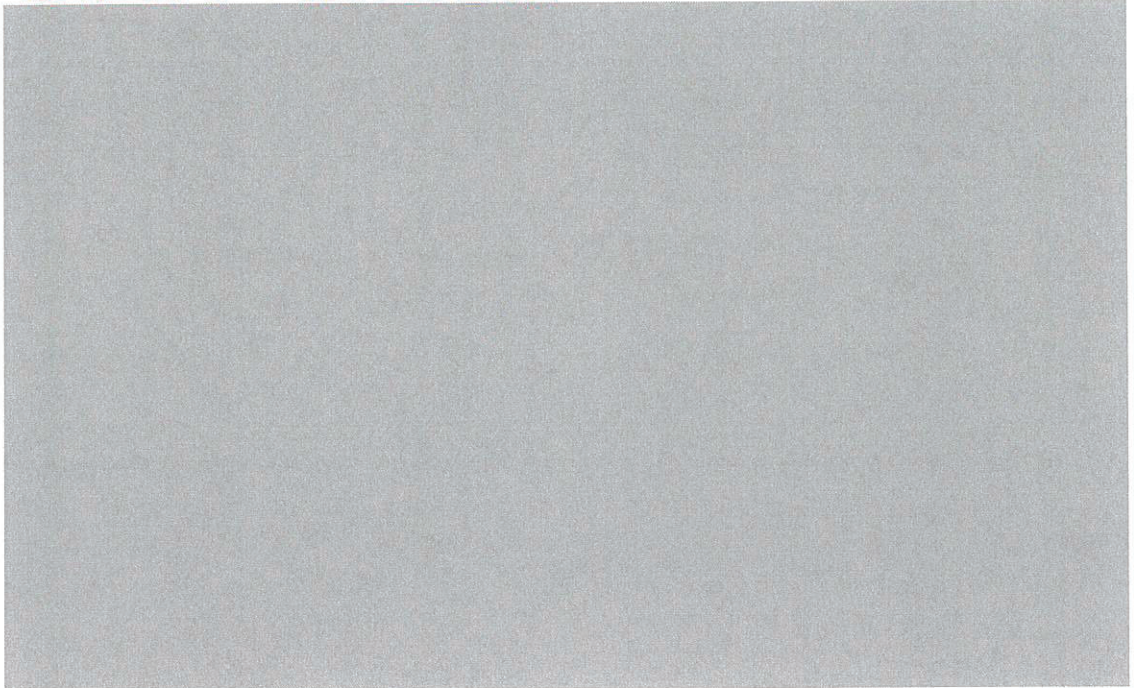
本願寺大書院庭園 (筆者撮影)

視線の方向



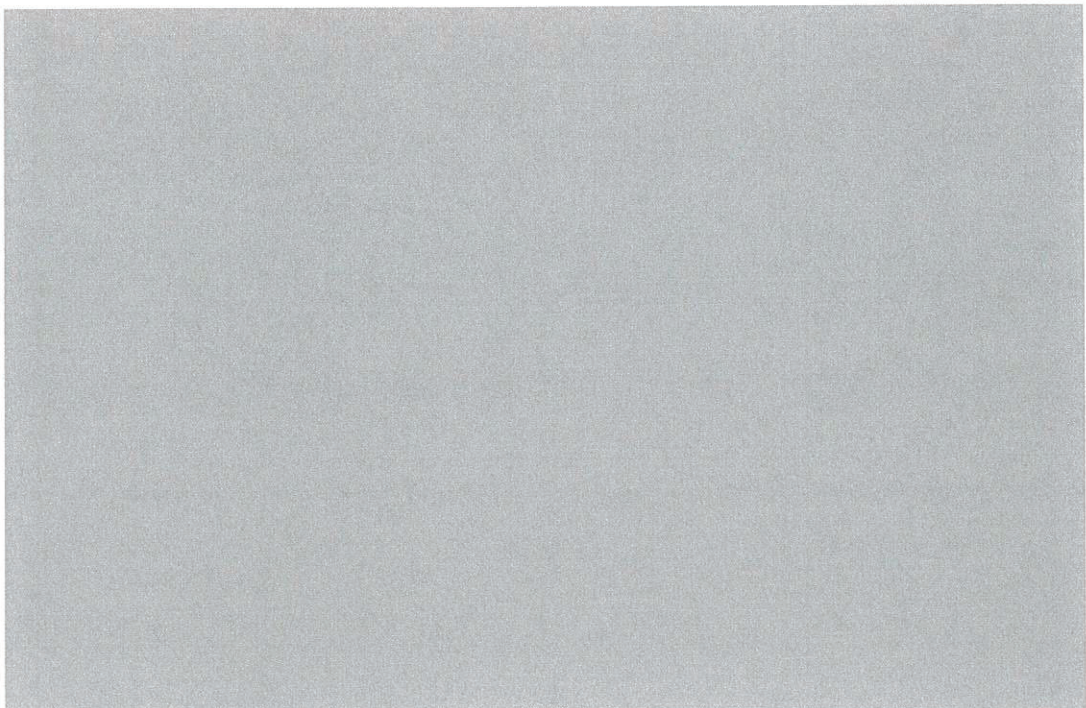
図2 「集中型の二面性」

庭園内の景を完結



龍安寺庭園

庭園外の景色を繋ぐ

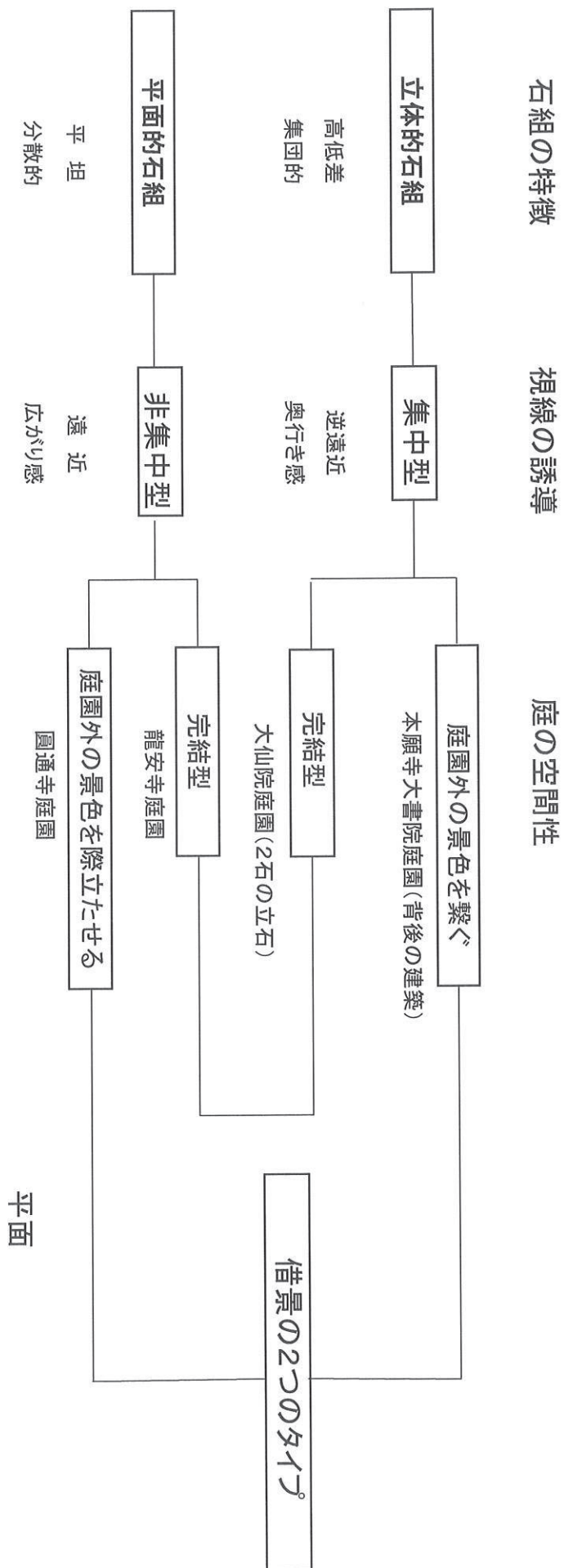


圓通寺庭園

図3 「非集中型の二面性」

小学館『日本庭園をゆく2』平成17年（2005）、pp.22-23

『日本庭園をゆく19』平成18年（2006）、pp.14-15 掲載写真引用



図一4 「石組と空間性の相関図」

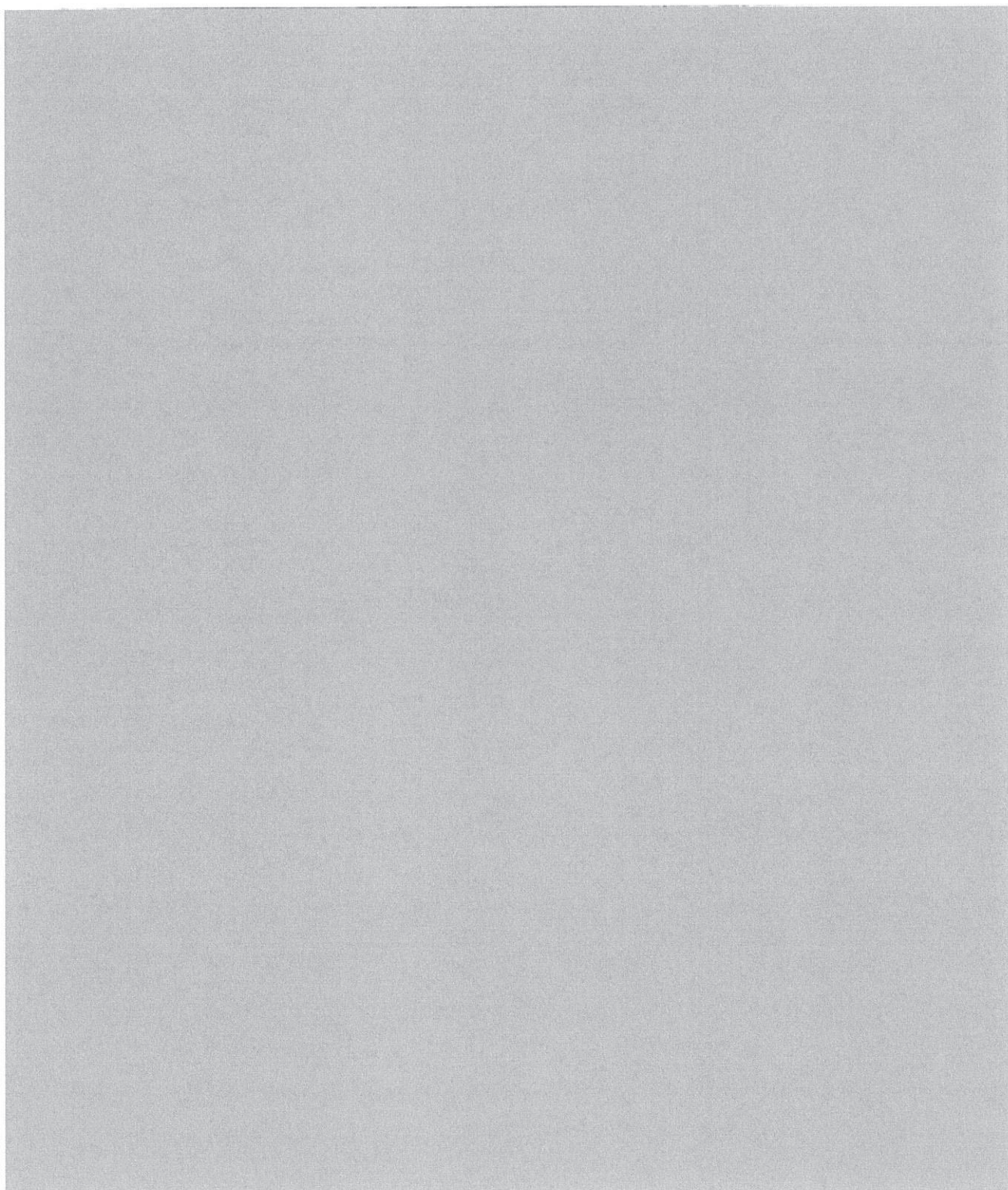


図5 「『船隠石』の絵図」

上原敬二『解説 山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年、p.13

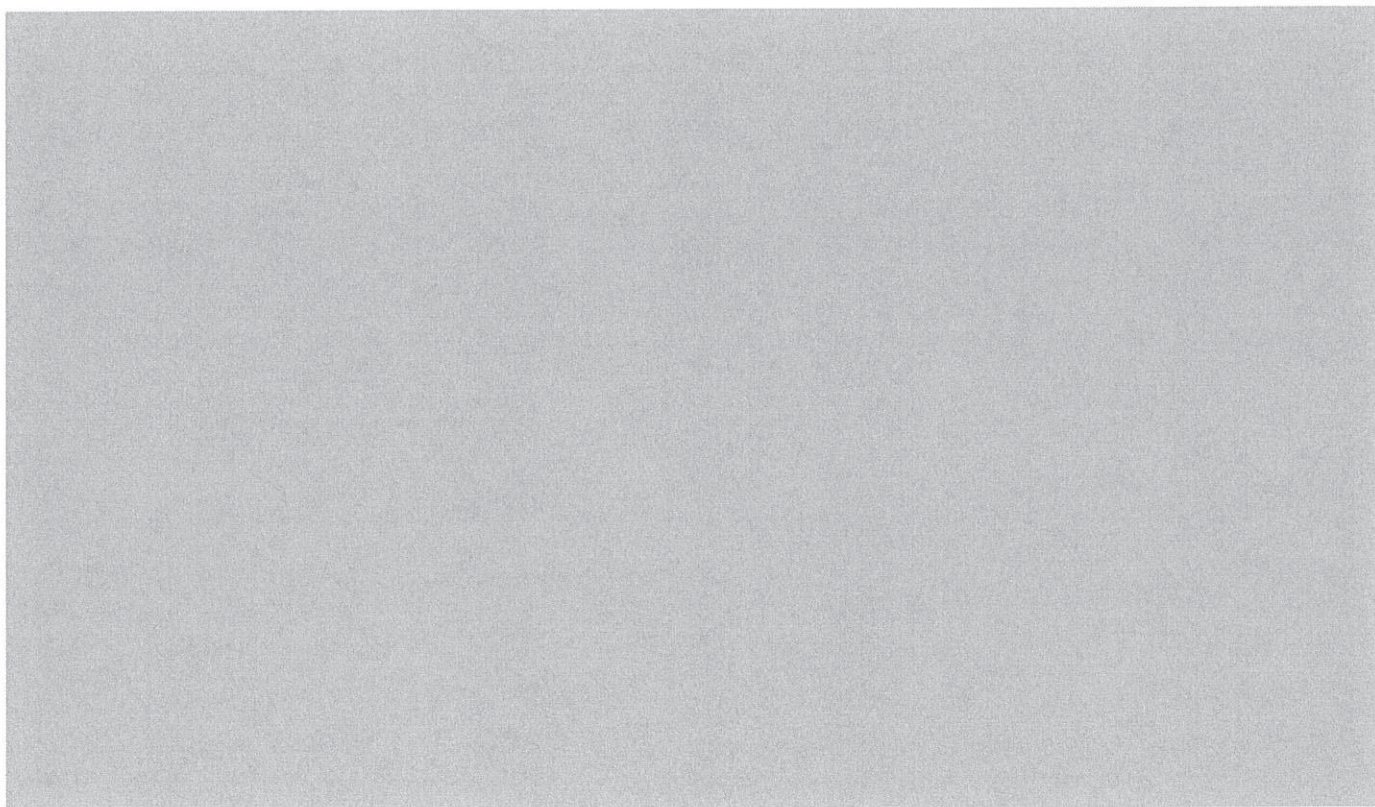
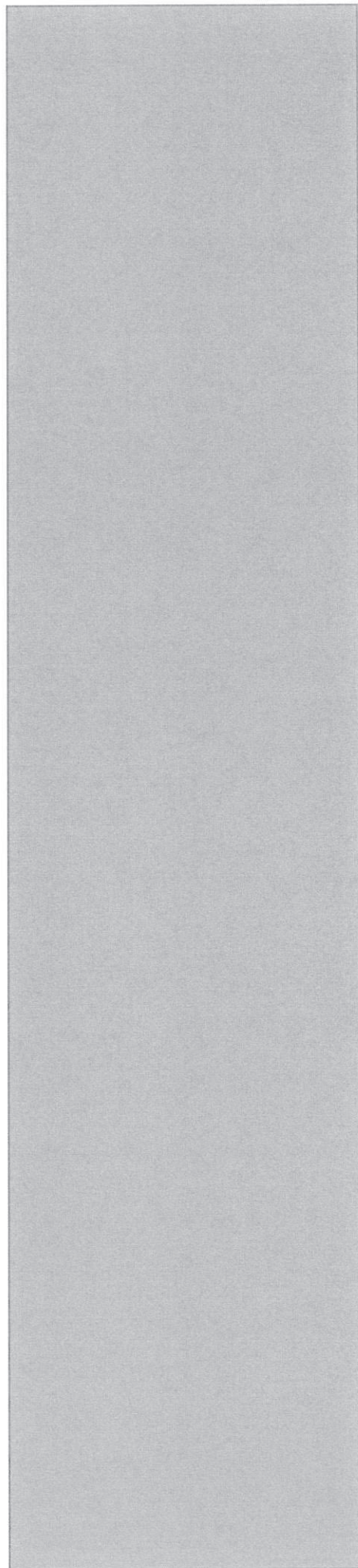


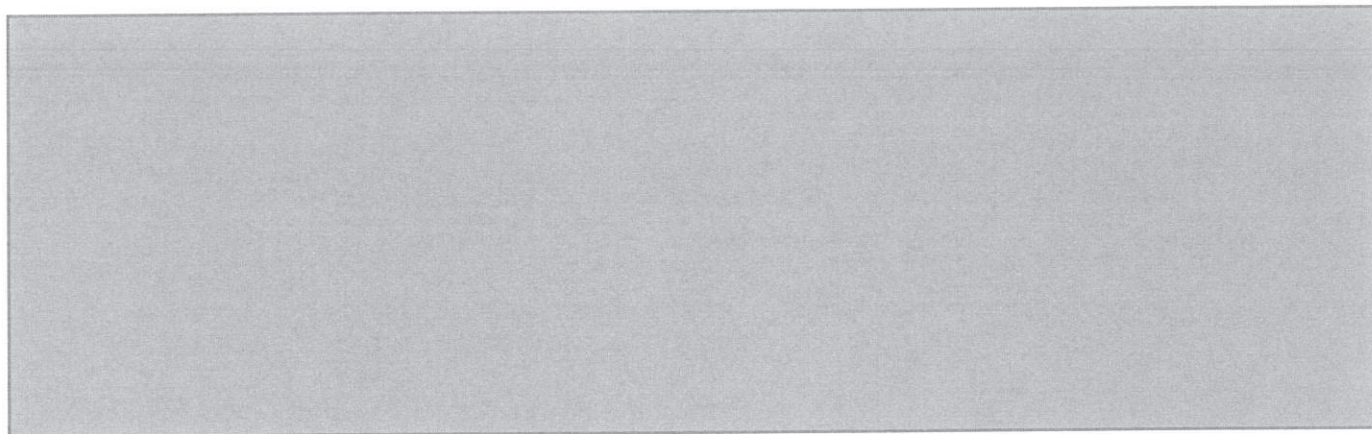
図 6 「「斜石」毛越寺庭園池中立石」 (筆者撮影)



石の氣勢 →

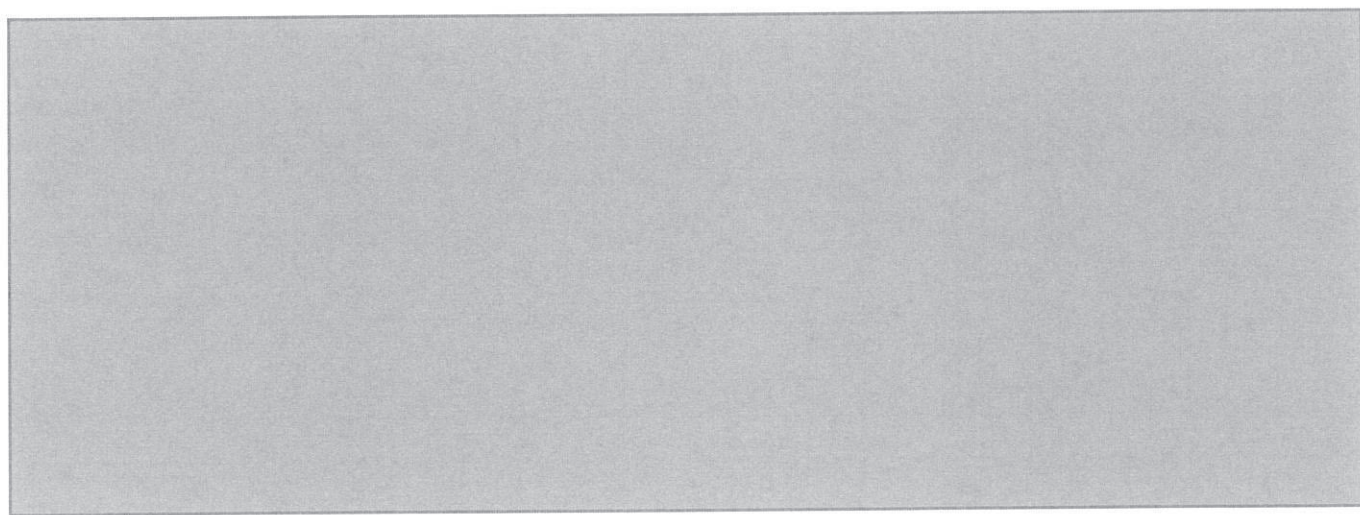
図一七 『『山水並に野形図』に描かれた絵図』

上原敬二『解説 山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年、pp.12-14



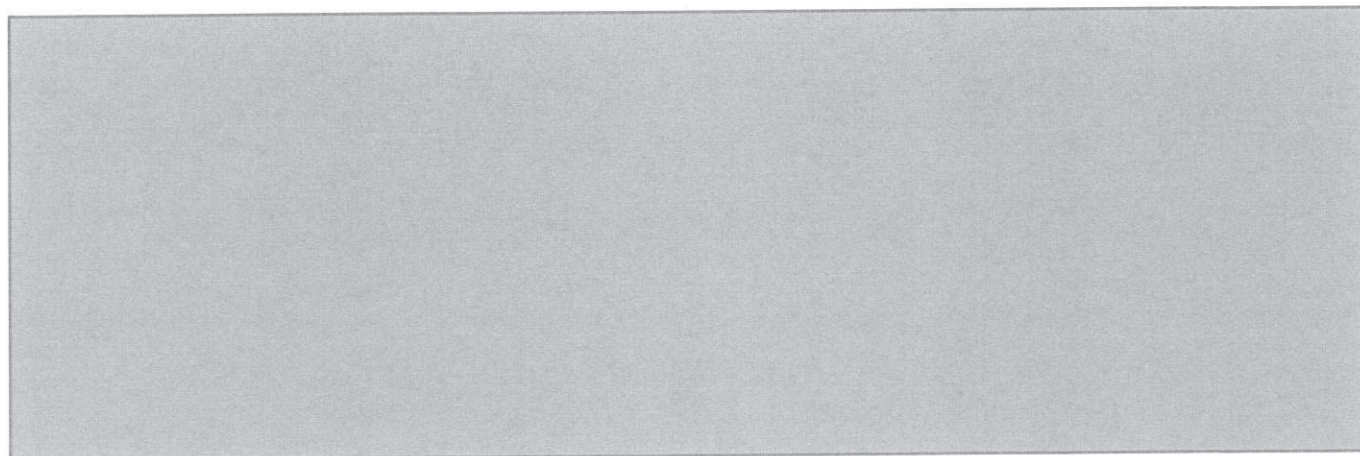
真の草体

真の真体



行の草体

行の体

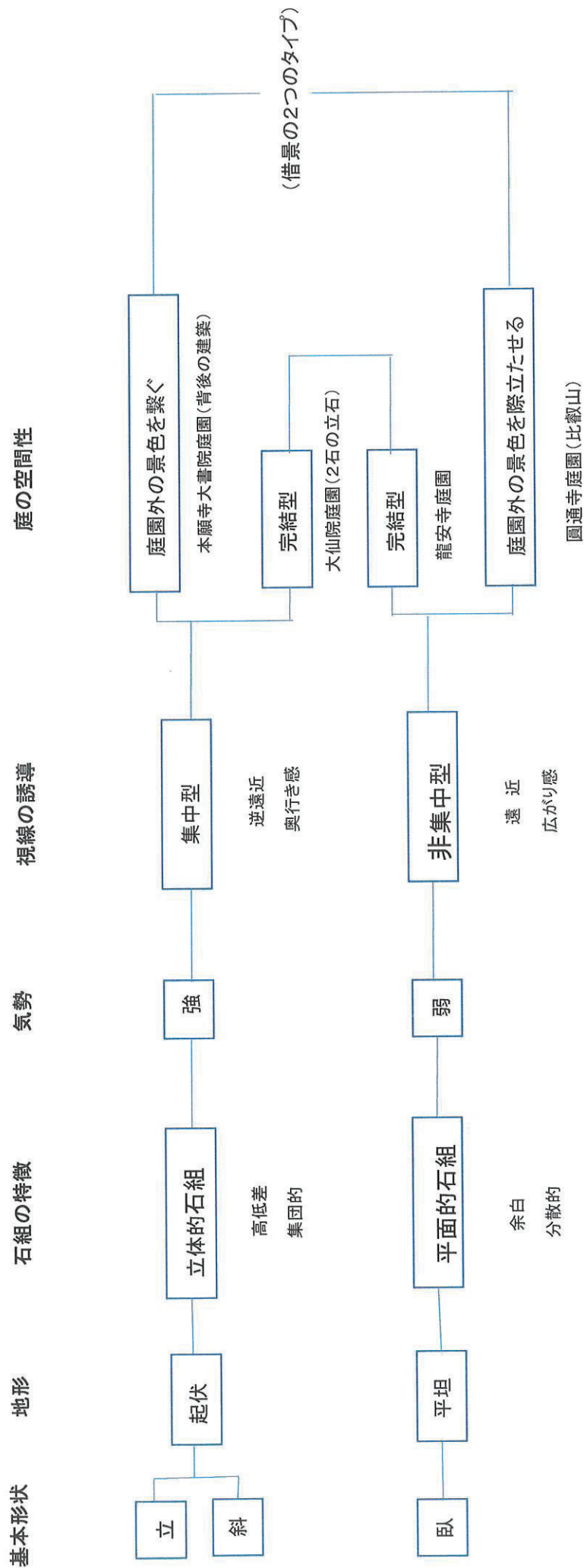


草の草体

草の体

図8 「真行草の挿図」

上原敬二『解説 余景作り庭の図・他三古書』加島書店、2006年、pp.58-63



図一9 「石組と空間性の相関図2」

The Theory of Stone Arrangement in the Garden Space

—Analysis of Description in Garden-Making Text—

1. Introduction

The stone arrangement in Japanese gardens plays a vital role in determining design frameworks, showing various forms during changes over time from the ancient days to reflect cultural backgrounds at each period. It also reflects the designer's taste and technique. Previous studies focused on stone form or formation; to review the stone arrangement from the garden space's viewpoint should be necessary, and a hypothesis was formulated from the author's master's research, the part of which is examined in this study.

2. Hypothesis from Fieldwork Findings

Focused on gardens in Kyoto, 47 gardens were investigated regarding stone arrangements, which were categorized into two design groups, three-dimensional and planar design, according to characteristics including stone sizes, crown height differences, and shapes.

The Daisen-in Temple garden produces the stereoscopic effect brought about by the milestone with an outstanding presence placed at the garden's far side, drawing the viewer's attention. The Ryoan-ji Temple garden, on the contrary, produces a planar effect of dispersing the viewer's sightlines to cover the whole garden, instead of drawing it to a specific stone. They show the arrangement type to be categorized into two, "concentration type" that concentrates the viewer's sightline, and "non-concentration type." As above, the arrangement plays a fundamental role as the framework in connection with the garden space.

3. Significance of Stone Arrangement in Garden-Making Text

To examine the validity of the hypothesis, four garden-making texts, namely, "*Sakuteiki*" the oldest relevant text in Japan written in the Heian Period, "*Sansui Narabini Nogatazu*" in the Muromachi Period, "*Sagaryu Niwakoho-hiden-no-sho*," and the first part of "*Tsukiyama Teizou-den*" in the Edo Period, were studied to extract arrangement description. "*Sagaryu Niwakoho-hiden-no-sho*," "*Sansui Narabini Nogatazu*," and "*Tsukiyama Teizou -den*" include garden drawings, which makes them the valuable investigation materials.

Descriptions regarding garden space were found in these texts, including in description of stones, instructions of attitudes or choices in placing stones, definitions of stones playing specific parts in the garden, and in passages such as "Sansui-en-kin-no-koto (Perspective of Landscape Formation)" or "Enpou-no-kei-wo Waga Teizen-e Ukuru-den (How to Introduce the Distant Scenery into the Design)." The examination of drawings showing the stone mode corresponding with the garden shape, undulation of land allotment, layout of stone each categorized as formal, semiformal, and informal, and stone shapes placed distant and near, also confirmed the significance of stone arrangement.